

テクノロジー×ファッショントンで新たな市場を探索しませんか ～医療×ファブリックスピーカーの事例を通して～

国際ファッショントン専門職大学 教授 平井秀樹・助教 梅木典子

産総研 人間社会拡張研究部門 統括主幹研究員 小島一浩
産総研 センシングシステム研究センター 副センター長 吉田学

結論

ファッショントンデザインの領域は拡張しており、単に造形物に美しい意匠を与えるという従来の行為ではない方向性が重要になっていきます。特にテクノロジー×ファッショントンの領域は成長市場であり、大学でも産総研のファブリックスピーカーがどのような市場性があるかということを、ファッショントンの視点から探求するPBLを本年度から行なった結果、展示のような手術帽とファブリックスピーカーを組み合わせた提案が学生からありました。その後、国立がん研究センター東病院にインタビュー協力を依頼したところ、医師の現場よりも医療行為でない領域、すなわち、患者の様々なニーズが拡大していることを確認しました。1st Sampleとしては医師向けを展示していますが、実際の調査結果を考えると患者向けにより広い市場性がありそうで、現在、学生の意見も踏まえて探索中です。

今後の展望

このような事例を通して、御社のテクノロジーとファッショントンでの新たな市場の可能性と一緒に探索してみませんか。そのためには皆さんの資源であるテクノロジーとSample、さらに特別講義ということで学生に技術の背景のご説明を来年度以降ご協力して頂くなど一緒に共同研究及び新たな市場開拓に向けた製品（デバイス）の開発を行いませんか。

（例）

Q:御社のテクノロジーに、ファッショントンという観点はありますか？
A: ファッショントンという観点を入れると新たな市場がの開発余地が見えてくるのではないかでしょうか？一緒に探索、サンプリングからはじめてみませんか？

ポスト・デザイン思考のPBL

国際ファッショントン専門職大学では、産総研デザインスクール（2018/7～2025/3）の小島一浩氏から、デンマークのカオスパイロットなどのメソッドを取り入れた、独自のポスト・デザイン思考のコンサルテーションを受け、知見をPBL授業に取り入れています。テクノロジーやアイディアを社会実装につなげ、イノベーションを創出するための、ポストデザイン思考とマインドセットとスキルを磨く、最先端且つ実践的な授業です。これは「産総研のファブリックスピーカー×ファッショントンで、新たな市場を開拓せよ」というテーマに対して約80名の2年生が挑み、その中で優秀なアイディアを社会実装に向けてプロトタイピングを行なったものです。

医療×ファッショントンの可能性①

医師側：手術帽は、滅菌（エチレンオキサイドというガス）処理の問題などで1回使い捨てが望ましい。滅菌リユースの仕組み開発など。

患者側：医療行為でない領域の患者のストレスを緩和する市場に様々なニーズがある。医療従事者に限らずマルチタスクで考える必要性がある。例えば、アピアランスケア。外見はクオリティ・オブ・ライフの中で大きな部分をしめる。

・開発事例 資生堂（LIFE QUALITY MAKEUP）

ファブリックスピーカーとは

銀メッキ短纖維を用いた伸びる配線



詳細は[こちら](#)



赤色 LED 配線を伸ばしてもLEDの輝度が変わらない。→電気抵抗が安定

産総研では、人間が快適に身につけられるウエアブルデバイスの実現を目指し、柔らかい電気配線、電極などの研究を推進。

医療×ファッショントンの可能性②

- ・ウイッグ、帽子付きウイッグ（治療による脱毛）
- ・検査部は病院の中ではかなり大きなポピュレーションだが、専門職で高ストレスを抱えている可能性がある（職業と医療従事者のストレス、診療科ごとの係数）
- ・医師が患者や家族に深刻な話をする場面でカーテンを閉じるようになっているが、音が漏れるので、カーテンから音楽が流れると音漏れや恐怖を緩和できるのではないか
- ・特に子供は機械の音に怖がるので、音楽の効果はありそう。
- ・弾性ストッキングは物凄い締め付けなので、リンパ腫の予防として毎日つけていたらそれだけでストレスになる。
- ・若い子達のメタバース空間での就労支援。
- ・色々な抗がん剤による味覚消失のストレス。料理教室、栄養士の食事のアプローチ。

インタビュー協力：国立がん研究センター東病院（千葉県柏市）